

「復旧」ではなく「復興」へ

復興へ向かう陸前高田市の今（第五報）



日本赤十字秋田看護大学
佐々木亮平

（ささき・りょうへい 看護学部 助教）

連絡先

〒010-1493
秋田県秋田市
上北手猿田字苗代沢 17-3
018-829-4125
ryohei-s@rcakita.ac.jp

I はじめに

東日本大震災発災後、岩手県陸前高田市（以下、市内または現地）でも初めてのお盆を迎えました。震災から5カ月がたち、災害救助法の適用も一部の内容を除いて終了となりました。今回は、平成23年7月14日以降、現在（8月17日）までの1カ月間の状況をご紹介します。

鎮魂・復興の盆供養行事もさまざまな思いの中で翻弄され、改めて今回の震災および原発事故の影響力の大きさを実感しています。毎月増減がありますが、現地の8月16日（被災から158日目）現在の死者は1546人、行方不明者は549人となりました。行方不明の方のうち死亡届が受理されたのは264人（約48%）となっており、初盆前に「ひとつの区切りを」

の大きな課題となっています。

この県立高田病院と入れかわる形で、発災以来、高田第一中学校敷地内において救護所を開設し、県内最長となる約140日間、延べ約1000人のスタッフを派遣してきた日本赤十字社の活動が7月29日（被災から140日目）をもって終了となりました。今後は、岩手県医師会にその活動を引き継ぐ形となり、8月7日から岩手県医師会立の高田診療所としてスタートしています。本来、災害時における一時的な活動を行う医療救護所ですが、現地では5カ月近くの間、医療支援活動が行われてきたことになり、閉鎖によりようやく通常の状態に向けて一歩進んだといえると思います。

また市内では当初分として予定されていた仮設住宅は完成し、入居者への鍵の受け渡しも終え、8月12日（被災から154日目）をもって事実上、市内避難所のすべてが閉鎖となりました。

II 「復旧」≠「復興」ではない

と決断されるご家族がある半面、やりきれない思いの中で法的に死亡認定をしてしまうことへのためらいを感じつつ過ごされている方々がまだ半数以上おられるという現実を私たちは忘れてはなりません。

それでも、こうして初盆を迎えたことや社会的インフラが整ってきたこと、災害救助法が段階的に解除され、全国からの支援部隊が次々と引き揚げ、避難所も閉鎖・解散されてきた現実を見るにつけ、これまでの災害からの「復旧」というステージから、新たな陸前高田市を立ち上げる「復興」という次のステージに確実に変わらなければならぬようです。

今回はこの「復旧」ではなく「復興」へという、当たり前ですが、これまで意識せずに使ってきた視点であらためて整理しながら考えていきたいと思えます。

発災直後から米崎地区コミュニティセンターを間借りする形で診療を継続してきた県立高田病院は、7月25日（被災から136日目）より、同地区内に新たに建設した仮設のプレハブ棟で本格的な外来診療を開始しました。プレハブ棟といっても建物や診療機器・体制は震災前に近い状況となり、診療科目としては以前よりも充実していることもあり、1日の外来受診者数は軒並み増え続けています。震災前は、200人/日でも多いくらいで、時折、そういう日がある程度でしたが、仮設病院オープン後、8月に入ってからほぼ平均でも250人/日近くとなり、地元基幹病院としての市民の皆さんからの期待がうかがえます。入院機能を持てるかどうか、引き続き一つ

た。同日は、市内最大の避難所でピーク時は1200人を超える方々が避難していた高田第一中学校においても避難所閉所式が行われ、地元や各地からのボランティアで運営されてきた避難所自治会「絆の丘」も解散しました。これにより第一中学校でも、ようやく従来の中学校としての日常を取り戻すことになりました。

ただ、現在の状況は、5カ月という時間はかかりましたが、とにかくまずは以前の水準に近い状態に戻そうという「復旧」に過ぎません。医療体制にしろ、避難所生活にしろ、これまでは特別な状況下における異例の仕組みやルールの中で動いてきたわけなので、それがようやく5カ月経って、震災前の状況に近い、通常の体制に戻りつつあるのだと、再認識する必要があると思います。私自身、これまでは「復旧」も「復興」も、その差をそれほど意識することなく使ってきたのですが、最

近現地スタッフの皆さんと話し合う中で、この部分をしっかりと整理して進まないと全体像も見えなくなってしまうと気づかされました。「復旧」と「復興」はイコールではないのです。

Ⅲ 現地スタッフが気づいた事業の復旧は復興…!?ではない

現地スタッフの皆さんと議論する中で出てきた意見をいくつか紹介します。

「最初は健診事業が始まれば、市民も少しは安心し、一つの復興の証になるのではないかと思つたが、そうではなかった。現実には多くの市民が家や家族を失っている状況にあるのであつて、住民の声をゆつくり聴くにもたいへんであり、もう少し時間がかかると思う」

「栄養面の配慮から三食作って食べま

しょう！とは簡単には言えない。生活環境が変わり、使い慣れた自宅とは異なる仮設住宅の設備の中でどれだけ本当にできるだろうか……と思う」

「市内でも直接被災した地区とそうでない地区があるのだが、実は被災直後に被災していない地区の住民が被災した地区の住民のために水を確保するなど奔走したことがあまり語られていない。あのとき、被災した地区の住民はもちろん大変だったが、そのときを支えてくれた人間がいたからこそ成り立つことが数多くあつたという事実を忘れてはいけない。どうしても直接、被災した住民を中心にまちの復興に向けた動きが活発になつてしまつていような気がする」

「この5カ月間、これができたから次はこれ、というように進んできた。今後、支援スタッフが収束・撤退する中で、やれる範囲でやらざるを得ない状況になると思うが、やらなきゃいけな

いのに、できないというのは責められているような気がしてくる」

「震災直後から断片的に行ってきたことが、今見えてきて、つながるようになってきた。事業としての健診や訪問がスタートすることで、見えなかったことが見えてくるようになってきたということが事実としてある」

「もう5カ月も経つたのか……と思う。頭や口ではこうしたほうがいい、ああしたほうがいいと考え、話せるが、正直なところ、どこかで手を抜かないとやっていけないと思う」

――等々。

これら現地スタッフの声に共通してあることは、「日常の生活基盤がすっかり無くなった」ということを再認識し、これをベースに考えていかなければならないことだと思えます。保健医療福祉関連分野に限らず、さまざまな分野で各種事業を再開し、震災前とまではいかなくとも、それに近い

形に戻そうと必死になつて毎日を過ごされています。ですが、必死になつて

事業を再開できたとしても、以前であれば、家があり、家族や仲間がいて、地域や地域のつながり、絆があつて、仕事があつて、学校があつて――という当たり前ともいふべき基盤が確保された上でのさまざまな事業であつたことを忘れてはならないと思います。これらの生活基盤を失つた状況の中で、仮設の住居や医療機関、学校、商店といったインフラに加え保健福祉関連事業が復旧しても、決して生活の質が「復旧」するわけではありません。

誤解を招く言い方になるかも知れませんが、行政に身を置いていた私自身の経験から言つても、行政は元の通りに戻そうとする「復旧」の部分は得意としますが、新しい価値を見出し、前例にとらわれず、一もしくはゼロから新しい仕組みを創り上げようとする「復興」の部分は苦手とする組織では

ないかと思えます。

事業はあくまで手段です。本格的に復興に取り組まなければならない今、行政は事業の再開を目的化するのではなく、生活基盤を失つた現状を真摯に受け止めて、地域の絆や関係性の再構築を意識しつつ、ありとあらゆる事業を展開していくことが大切だと思います。

Ⅳ この5カ月を認めるところから

8月12日（被災から154日目）に第11回目の陸前高田市保健医療福祉に関する包括ケア会議が開催されました。

8月末で全国からの保健師関連チームも収束・撤退ということもあり、9月以降は各支援チームの規模も一段と縮小されることが予想されたことから、それぞれこの1カ月間の新しい動きだけでなく、震災以来5カ月間の振

り返りや評価のコメントをいただきました。多くの反省点、改善点もあったのですが、おおむねこの5カ月間よくやってこられたのではないかと——という意見が大半を占めました。それはもちろん、多くの外部支援チームの皆さまの熱意と工夫にあふれたお力添えがあつてこそであり、あらためてこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

できたのです。その結果、5カ月たった今、「他人に話していいんだ」という雰囲気陸前高田市の中に少しずつ定着してきたようです。しかし今後、市に「このころのケア外来」を設けたときに、果たして住民の方が利用するでしょうか。難しいかも知れませんが、このころのケアを前面に出す方法と同時に、市をはじめあらゆる機関・団体が行う行事や事業一つひとつが、実はこのころのケアにつながっているという意識（認識）を持つことが大切です。お互いのこのころのケアを仲間同士で支え合っていた地域が崩壊した今、どのような地域づくりを目指した「復興」が求められているのかをこれから現地スタッフたちと模索し続けたいと思います。

被災当初から「このころのケアチーム」が避難所に入ったものの、利用者は支援者側が思うほどありませんでした。しかし、「このころのケアチーム」のベストを着た人たちが毎日避難所をはじめめとして地域に向いて「このころのケア」の必要性をPRする一方で、遠方から来たありがたい専門職の人たちだからこそ今まで口に出せなかった愚痴を含めた不満や不安を表出することが

このような包括ケア会議の場を定期的に持てたこと、保健所を含めた現地スタッフと長期支援チーム、そして交代制で入る各チームの連携体制が早い

段階でルール化できたことを含め、良い意味でこの5カ月を振り返り、認め合うことで、これから先を考える新しい力になるのではないかと期待を込めて感じております。

V 高校生の励ましに感激

その「これから先」を考える上で、すぐく励まされたエピソードがあります。

私の原稿を読んだ市内の現役高校生がご家族や自宅を失ったにもかかわらず、既に自分の将来を見つめ、「将来、保健師として働きたい。陸前高田市の保健師になりたい」とメールをくださったのです。私は本年5月号の掲載以降、基本的に現在もしくはこれまでに保健師として活動をされている皆さま（されていた皆さま）や地域保健や公衆衛生活動に関係のある方々への

メッセージを……と思い報告してきましたが、5年とも10年とも20年ともいわれる復興にあたり、次世代を担う若者にも届いていたことに大きな驚きと感動を覚え、目頭が熱くなりました。すべてを前向きに肯定的に考えることはできませんが、10年、20年先の地域を背負って立つ若い世代の凛とした声に大きな可能性を感じています。

VI 住民の皆さんの声を

前回までも「陸前高田市保健医療福祉未来図（復興計画）たいてちょう台」¹⁾については継続して紹介していますが、これを基に市全体の復興計画の策定²⁾も進んでいるところで

す。しかし、現地スタッフはもちろん、住民の皆さんの声が十分に反映されていないのが現状です。だからこそ、「た

たいてちょう台」としているのです。が、より具体的に住民の皆さんの声が入り、見える形にしていくことが今後の大きな課題の一つとなります。

例えば、保健医療分野の具体的施策の一つとして掲げている「保健医療福祉集中化エリアの創設」について、60頁の図のようなものをイメージしやすいよう作成しています。しかし、今この存在を知っている住民の方がどのくらいおられるでしょうか。そして今までご意見をくださった方がどのくらいおられたでしょうか……。残念ながら、これまでは私自身も「復旧」の部分で精いっぱいだったところが否めません。春先に実施した全戸調査の結果の積極的な公表をはじめ、具体的な「復興」に向けたデザイン（計画）の周知と、ご意見をいただく機会の設定など、今のこの生活基盤が無くなったという現実を踏まえた陸前高田市の未来について、住民の皆さんと考える「場」を

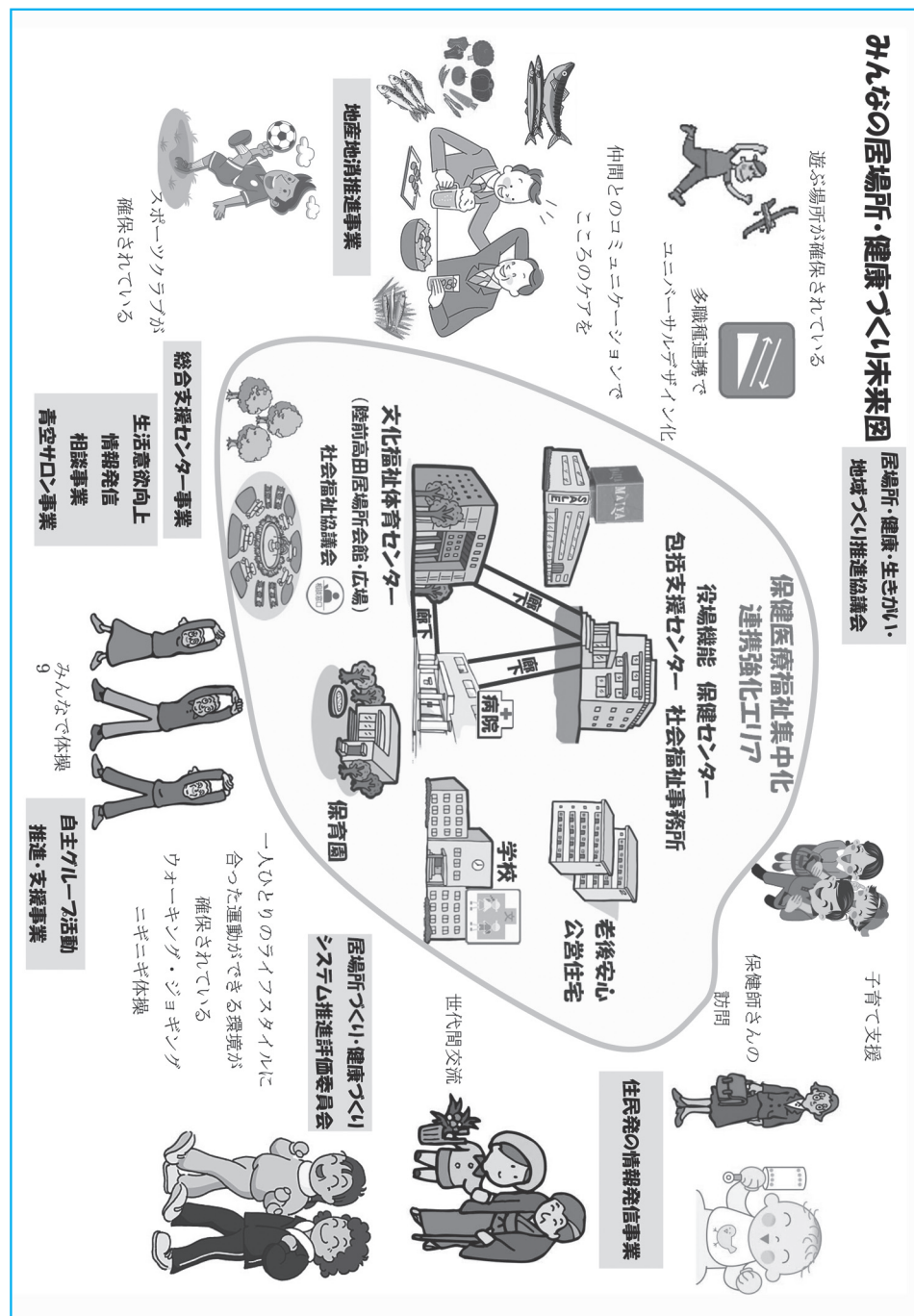
設けることができていませんでした。

しかし、住民の方々はいろいろと考えておられます。今回、健康体操普及員リーダーの松野サカエさん（健康運動サークル たかた☆ハッピーウェーヴ！会長）は、「体操は手段。体操をする目的は一人ひとりが顔を合わせることで。実際、仮設住宅でラジオ体操をやると、『あんだ、ここにいたのぉ！』と知り合い同士が初めて顔を合わせる機会になつている」と話されていました。住民の方々は今、何を手段に絆を再確認しなければならぬかを理解され、実践されているのです。

これまでも公衆衛生ボランティアとして後方支援をいただいている公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長の岩室紳也先生や公衆衛生ねつとの皆さまのサポートにより、復興計画は「たいてちょう台」という形になつていくところです。今後は、本当の意味での「復

みんなの居場所・健康づくり未来図

居場所・健康・生きがい・
地域づくり推進協議会



興」ということを意識し、住民の皆さん、そして、現地スタッフの皆さんと一緒に考えることができるようにしていければと思います。もちろん、外部の方々から多くの意見が寄せられることで、真の意味での復興計画づくりが進むと考えていますので、陸前高田市の案に対して積極的にご意見をいただければ幸いです。

VII 現地に常にないない 支援者として

私は現在も毎週、現地に入り支援活動を継続しています。これまで22週計45日間となりました。発災直後こそ1週間単位で現地に入っていました。現在は原則、週1回2日間が限度となっています。恐らく今後はこのペースも難しくなってくると思います。発災当初から「週2日程度の支援が現地のためになるだろうか」と疑問を

持ちながら進んできました。私のような「現地には常にないないが毎週来る支援者」という形式は今後起こるかもしれない災害のモデルにはならないかもしれない。ただ、生活基盤だけでなく復興支援という意味では私のような活動の意義を検証していただくことはそれなりに意味があると思っています。

今後も現地で起こるであろうさまざまなことと真摯に向き合い、現地スタッフそして直接的な支援の形

はなく、全国に皆さんとともに進んでいきたいと思っています。引き続きよろしくお願いします。

文献・インターネットサイト

- 1) 公衆衛生ねっと (<http://www.koshu-eisei.net/>) 内「陸前高田市のいま」
<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakata.html>
- 2) 陸前高田市ホームページ (<http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/>) 「震災復興計画検討委員会資料参照」

図3 陸前高田市健康推進課内における復興計画会議の様子 (7/1)



現地職員に長期支援の名古屋市、一関市と神戸市、岩室先生とともに実施

編集部からお詫びと訂正

8月号57頁の図3に間違った写真が掲載されていました。

深くお詫び申し上げます。正しい写真をキャプションとともにあらためて掲載いたします。

なお、8月号に掲載されている写真は「陸前高田市保健医療福祉包括ケア会議の様子(7/2)」でした。